

花見の都市——江戸・大坂の風土

はじめに

花見は日本人の年中行事として欠くことのできないものであるが、本来民俗的には、農耕の予祝儀礼が基本であるといつてよいだろう。各地に「種蒔き桜」「田打ち桜」と呼ばれる桜があるが、これらはその名称が示すように農事暦と結びついているし、その咲き具合によって豊凶を占う場合もある。そしてしばしば花見は、岳登り・山登りの風習とつながっている。春の一日、近郊の山や丘に登り、飲食を共にし、花を愛でる風習であるが、これは単なる遊びではない。「春山入り」「春山行き」と呼ばれ、山に登り飲食することは、山の神、すなわちやがて田に降って田の神となる神との、いはば神人共食という日本の祭りの原型がここに認められる。それによって山の呪力、花の呪力を授かるのである。したがって、この場合、花見の花は必ずしも桜である必要はない。その土地の、その時候に相応しいものであればいいのであって、桜以外に、辛夷・石楠花・躑躅など地方によってさまざま

ある。たとえば、

谷 口 廣 之

4月8日ごろは日本では古来より〈春山入り〉の日にあたる。〈春山入り〉とは4月8日ごろ近くの山に登って花を採ってくる習俗である。新潟県刈羽郡の村々では毎年4月7日に物忌みをし、翌8日の朝にハレギを着て付近の山に登り、藤の花房を持つてきて仏壇に供えるという。また鹿児島の大隅半島では、4月3日ミタケマイリと称して若い男女が山登りをし、山ツツジの花を持つて帰る風習がある。また山に登らないまでも、4月8日に野花を飾る風習もしばしば見受けられる。播磨では4月8日を単にハナとも呼び、7日の晩に白とヨモギの団子をこしらえ釈迦像に供え、8日にはウツギ、ツツジ、石楠花、シキミなどをたばにして長い竹の先につけ、それを庭先に立て、これをタカハナと呼ぶ。この風習は広く西日本の各地方にみられるが、その場合飾られる花はツツジや石楠花の場合が多い¹⁾。

そうした民俗としての花見の伝統に対して、都市の花見があ

る。近世期、巨大な消費都市として発展した江戸、大坂においては、春の行楽行事として花見は欠くべからざるものであった。それぞれに多くの花見の名所が形づくられ、今日になお継承されるものも少なくない。しかしそうした名所が形成されるに到る事情、あるいは背景は、江戸・大坂に必ずしも共通するものではない。それは江戸・大坂が有する都市としての在りよう、すなわちそれぞれの都市の風土に関連すると考えられる。ここでいうところの「風土は、人類がそれぞれの拠つて立つ自然環境を造りかえ、意味づけた社会的・歴史的環境としてある。それは宗教をはじめとする精神的・文化的な基盤でもある。(中略)このような風土は各地域の生活文化の基盤で」ある。そのような視点に立つて、本稿では、両者の花見の名所の形成過程を比較検討し、江戸・大坂の都市としての風土の一端を明らかにしたい。

I 花見の大坂

大坂は、淀川河口に発展した都市である。現在の海岸線はすべて近世、近代の埋め立てによるものであるが、大川・安治川・木津川などの自然河川（本当はこれらも人間の手が加わっているが）、横堀川などの人工運河に囲まれた、文字通り水の都、水上都市であった。

そこで近世期における大坂の花見の名所を拾いだしてみると、大坂の地形上の背骨にあたる上町台地には、高津宮・玉造・新清

水・安井天神などの寺社が挙げられる。寺や神社が花見の名所になるという両者の結びつきは、おそらく、境内という一定程度の広さを有する空間的物理的条件と、参詣・参拝という宗教的な集客条件とを満たす場としての性格から当然のことと言えるだろう。そのことは、江戸であれ大坂であれ変わらない。

大坂に特徴的なのは、水上都市という環境にあつて、水辺の花見の名所の存在である³⁾。例えば、天保山がそうである。天保山は、安治川が大坂湾に注ぎこむ河口に築かれた人工の山であるが、河口に拓かれた都市の宿命として、上流から運ばれる土砂によつて年々川底が浅くなるという事態を避けることができない。そのため、船の運航を維持するために、近世の大坂では何度も川浚えが行なわれた。その中でも最も大規模だったのが天保年間に行なわれた川浚えであった。その時、川から浚えられた土砂を積み上げて生まれたのが他ならぬ天保山であった。もともと天保山は、目標山と呼ばれ、大坂湾に出入りする船舶のランドマークとなっていたのだが、やがて天保山は、四季を通じて大坂の町人が憩う遊興の地となつていく。とりわけ、春は花見の名所としての賑わいを呈したことが、次の『天保山名所図会』などからうかがうことができる。

並木の櫻咲き匂ふ頃は遠近の遊客ここに打ちむれ、酒宴を催し、詩歌連俳に風流を楽しみ、糸竹のしらべにうかれ、春の遅日を戯ぶれ暮らして、武庫山に紅日の没するをしめり。⁴⁾
此山ハ四方の眺望に露ばかりも障りなく、風景美観なるがゆ



図1「天保山名所図会」

忽に四時ともに遊興の人絶ゆることなく、其うへ山中及び平地に櫻多きにより、花の盛の頃ハ殊さらに賑はし^⑤

この天保山に並ぶ水辺の花見の名所が、桜宮一帯であつた。今日でも、この辺りは造幣局の通り抜けとして広く知られた大阪を代表する花見の名所である。染井吉野が盛りを過ぎて葉桜となつた頃、何十種類もの桜が開花して市民に開放される大阪の春の風物詩となつている。

実は、この造幣局の桜は、明治期に移し植えられたもので、元は現造幣局の北側にあつた津藤堂藩の敷地に植えられていたものであつた。次の資料に示すように、藤堂藩は三十万石を超える大々名であり、諸藩の中でも広大な蔵屋敷を構えていた。

十一 諸大名御屋敷付

藤堂和泉守殿 卅二万三千石

伊勢津

屋敷 天満川崎五丁目^⑥

管見の範囲では、明暦三年（1657）版の『新板大坂之図』^⑦に「藤堂天角」と記載されており、以下、元禄元年（1688）版の『龍歳増補大坂図』に「藤堂和泉」「藤堂伊豫」、元禄四年（1691）版の『新撰増補大坂大絵図』、貞享三年（1758）版の『新撰増補大坂大絵図』、享保末の『撰津大坂図鑑綱目大成』も同様の記載がある。また寛延改正（1749頃）の『撰州大坂図画』には、「大坂御蔵屋敷所附」「勢州安濃津 三十二万三千石 藤堂和泉守」とあり、降つては幕末の文久三年（1863）

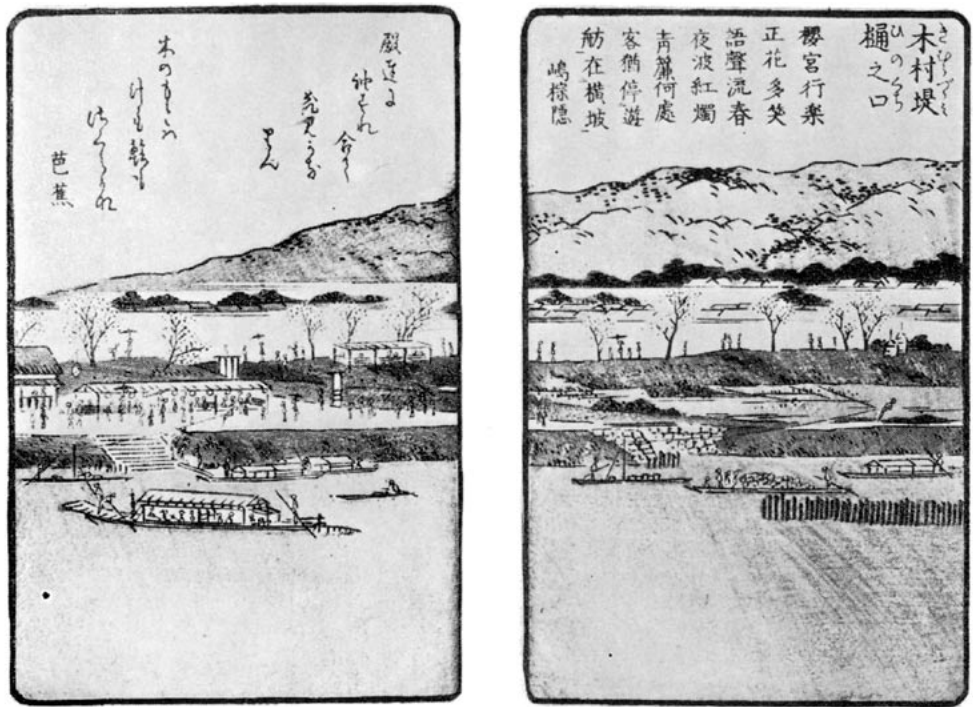


図2 「淀川兩岸一覽」

版の『改正増補國宝大阪全圖』に「藤堂」と記されていて、しかもその場所は当初から動くことがないから、江戸時代を通じて、この淀川（大川）右岸に藤堂藩の蔵屋敷があり、後に造幣局（当初は造幣寮）に譲られる桜が岸辺に咲き誇っていたはずである。その藤堂藩の蔵屋敷の上流、現在は源八橋が架かっているが、江戸時代には源八の渡しが兩岸を繋いでいた。その右岸地域は木村堤と呼ばれ、ここもまた桜の景勝地であった。

木村堤 右樋之口の堤をいふ。此の地は淀川の西岸にして、国分寺村の辺りより櫻の並木つらなりて、弥生の花さかりには、都下の貴賤ここに打むれ遊宴を楽しむ。殊に向ふの岸は櫻の宮につづきし堤なれば、是もさくらの並木にして、爛漫たる花の景色、淀川の流れに映じて絶景也。

つまり、淀川右岸・大川右岸はすでに近世期から桜の名所であったことがわかるが、では一方の左岸はどうかというと、右岸にもまして桜の名所であった。なによりも桜宮という地名そのものがその証である。社伝によれば、洪水のために社殿が上流から流れ付き、ここに祭られるようになったとされており、その名に因んで、以後桜が多く植えられ、左岸を彩るようになっていったとされている。

櫻宮 大長寺の北中野村にあり。例祭九月二十一日、當社其初ハ野田の小橋故大和川の堤の字を櫻野といふ所にありしを、後世こゝに移すゆへに舊地の名を以て櫻野宮と號せしが、いつしか境内のほとりに數百株の櫻を植しより今ハ櫻の

宮と稱して花ゆへなづけし如くなるも所謂名詮自性なるべし。⁹⁾

『都島区史』¹⁰⁾によれば、「もと東成郡野田村（現在の東野田地区）にあつたが、元和六年（一六二〇）の大和川洪水で社殿流失。中野村字宮脇に漂着したので、そこに社殿を建てたが、低地のため、宝永六年（一七〇九）現在地へ移された」とある。上方落語に「桜ノ宮」「百年目」という演目があるが、いずれも庶民や町家の旦那衆が桜宮堤に繰り出して観桜し、饗宴、というよりも落語らしく狂宴するさまが活写されている。¹¹⁾

桜宮の上流、すなわち先の木村堤の対岸にも桜並木は続いていた。そしてこの兩岸を渡し繋いでいた。

櫻之渡「右社頭の上の方にあり。川崎の浜への渡なり」¹²⁾此渡舟は弥生の花の頃のみ有し。常にはあらず。故にさくらのわたしと号す。

源八渡口「右さくらの渡しの上に有。西成郡源八町より東生郡中野村への舟わたし也。故に中野の渡とも云。渡の長さ九十間と云」

源八をわたりて梅のあるじかな 蕪村

中野「右わたし場の一村なり。則櫻の宮は当村の生土神なり」当村の農家に酒肴を販ぐあり。其塩梅鄙に似ずして遊客しばしば賞玩す。就中泥鰯汁を以て名物とせり。尤も花の頃を始として卯月中旬をかぎりとする。¹³⁾

普段は長閑な田園風景とともにそれとは対照的な花見の頃の賑わ

いの有様を彷彿とさせる記述である。

そこで問題にしたいのは、天保山にしろ桜宮にしろ、どのように桜が植えられ、名所となるまでに至ったかというその経緯である。天保山は先述したように、大規模な川浚えの結果生まれたものであるが、川浚えそのものがその多くを、民の力、活力、及び財力に負うものであつた。次の資料は、天保の川浚えが実現する事情を示している。

乍憚口上

一今般勢田川御浚方之儀二付、三郷町々差支有無申上候様被仰渡、奉畏、則町人共後案相歎罷在候、別紙奉申上候、然ル処左之通奉願上候

右勢田川御浚二相成候ハ、水勢強、増水如何程相増候儀、水下之儀難斗、当時惣躰川床相埋、從御上様精々御浚方被為在候ニモ、土砂相嵩、当時ニ至リ、両川口者勿論其外川々川床相埋、通船差支ニ相成、実々難漕之折柄、猶又右御浚方相成候ハ者、尚更水勢強ク、増水有之、上砂相嵩、此上両川口相埋、入船等無之候ニ者、弥土地不繁盛ニも可相成哉ト、重々歎ケ敷奉存候、何卒恐多御儀ニ奉存候へ共、三郷町人共ヨリ年々奉上納候川浚御冥加金、壹ケ年金九千九百五十兩奉差上候上納金、以来御赦免被為成下候ハ、右金子を以、御上様ヨリ御浚方被為成下候外、三郷町々ヨリ両川口并其外川々為御手当浚方仕、同様御役人ヨリ御見分請、出精浚方仕候ハ、土砂不相埋、入船多く、通船不差支、永久土地繁昌

仕、町人共一同安堵渡世仕、冥加至極難有奉存候、何卒恐多御儀ニ奉存候へ共、年々川浚御冥加金永代御赦免被為成下候様、町人とも一同奉願上候付、乍憚各様方ヨリ右之段御願被下度、此段書付ヲ以奉申上候、以上

天満三組耆躰組合限¹⁵

つまり、もともと川浚えのために、「三郷町人」、つまり北・南・天満の大坂町人たちは年間一万両近い上納金を納めていたのだが、この度の川浚えに関しては、例年の上納金を免除してもらえるのであれば、三郷町の負担で安治川・木津川の両河口とそれ以外の川についても川浚えを行ないたい、という提案である。事実、次のような御触れが出て

二月十四日 今度難有御仁恵ヲ以被仰出候御救渡御普請之儀御手伝申上度存寄候者共者、無遠慮以書付可申上候事¹⁵

それから一カ月も経たないうちに、今度は次のような御触れが出されている。

三月六日 御救渡ニ付、冥加金之ためとて金銀高差上、其上 浚土砂等をも申請度旨申立候段、御賞美事

此度淀川筋其外市中川々御救渡被仰出候段、全当地繁栄諸民御救之儀ト、御仁恵之程難有奉存、冥加之ためとて夫々金銀高差上、其上浚土砂等ヲも申請度申立段、奇特之志ニ付普置候、猶右之趣江戸表江も可申立候¹⁶

町人たちの協力が、いかに積極的で迅速なものであったかということがわかる。ちなみに鴻池善衛門などの豪商からの寄付は次の

ようなものであった。

天保二卯年四月十四日上納分

大坂両川口并市中川々大浚被為成下候ニ付、三郷町々より差上候冥加金銀高

一金 千三百両 今橋貳丁目 鴻池善衛門

一同 千三百両 玉水町 加島屋休右衛門

一同 千両 大川町 加島屋作兵衛

(中略)

一同 拾五貫目 高間町 吉野五運

此ノ高金壹萬千八百貳拾両

銀貳百九拾貫両六百目

此金四千八百七拾両

合金壹萬六千七百両

右者大坂豪家丁人三拾六軒へ被仰付候大浚ニ付御冥加金銀差上候也¹⁷

しかもこれは「豪家丁人」と呼ばれる富裕な町人たちによるもので、それ以外の町人達の間も合わせると、二万二千両を超えた記録されている。

町人の協力は金銭的負担ばかりではなく、労力負担も行なわれた。もともと大坂では、それまでも神社や寺院の遷宮・開帳の際、地盛りや地固めのため、氏子や信徒による砂持ちという一種の労働奉仕が行なわれ、いつも祭礼のようにきわめて賑々しく行なわれるのが通例となっていた。¹⁸ こうした物心両面の町人達の尽

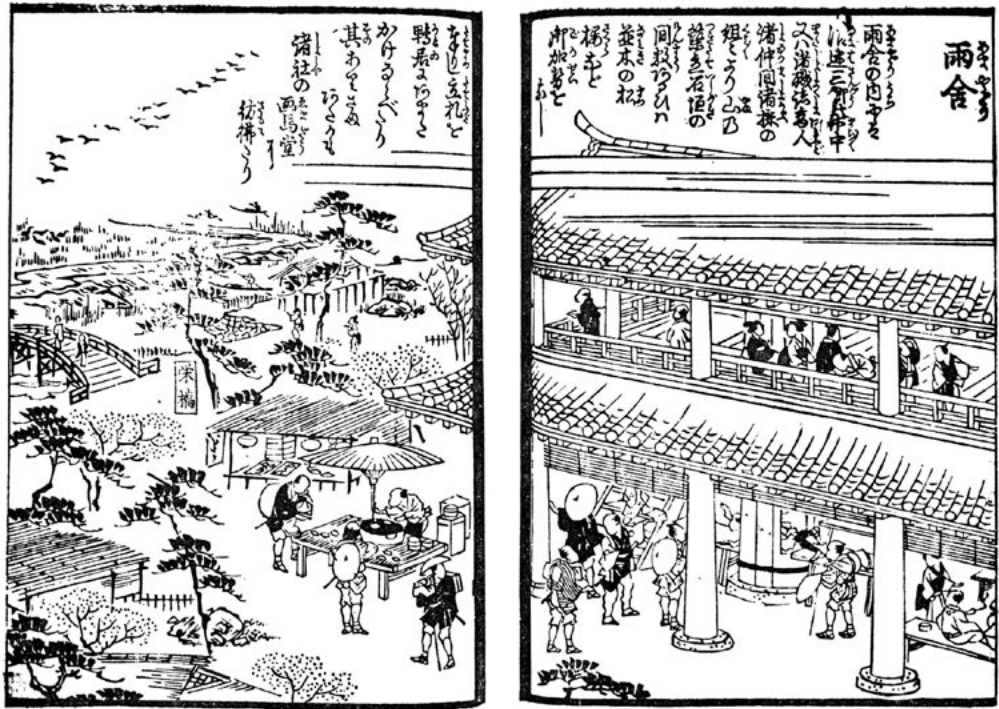


図3 「天保山名所図会」

力で川浚えは成功し、その結果、天保山が完成したのである。

このようにして出来上がった天保山がやがて四季折々の名所となつていくのだが、そこにも実は町人たちの力が関与している。つまり完成した天保山は大坂町奉行の直轄地ではあるものの、実質は大坂三郷に貸し付けられ、三郷は年番をもつて番所を置き管理した¹⁹⁾。そしてそののみにとどまらず行楽の地として整備していったのである。次の資料はそのことを具体的に示している。

雨舎の内には浪速三郷の市中、または諸職・諸商人・諸仲間・諸株の組々より、山の築立て・石垣の間敷あるいは並木の松樹など、御加勢をなし奉りし立札を、鴨居にあまたかけならべり。そのありさまあかも諸社の画馬堂に彷彿たり。²⁰⁾

雨舎は、天保山の中に設けられた施設の一つで、雨舎、「あまやどり」という訓が与えられているところからして、悪天候時の避難所、あるいは休憩所という役割を担っていたのであろうが、そこに所狭しと並べられた「立札」に、天保山の「山の築立」や「並木の松樹」が町人たちの「御加勢」に依るものであることが銘記されているのである。

つまり、天保山に松・桜を植え行楽の地としたのは、他ならぬ町人たち自身であった。このような事情は、桜宮の場合も見て取ることができる。次の記事は、近世期、大坂市中の河川で、荷揚げや荷積みに携わっていた上荷船・茶船の仲間を仕切っていた「浜親仁海部屋喜兵衛」の遺したものである。

三月上旬

桜宮堤大長寺より春日江村迄桜三千本植候二付、寄進相被頼候二付、

五ツ場所所 金五百疋

五ツ場所共

四ツ足屋仲方 錢五拾貫文

并

浜先船附揚り場直シ手伝 拾貳貫九百文

又金式朱茶店へ余内⁽²⁾

「大長寺より春日江村まで」とあり、これは大川の左岸の堤の桜である。桜宮の桜の植樹もこのような町人たちが関わっていたのである。では右岸の桜はどうか。右岸の賑わいの様子をいくつかの資料から見えていきたい。

木村堤「源八の渡場より川上の方をいう」此地は淀川すじの西岸にして堀川に通ずる流水の樋口あり、是からして下の川岸には櫻の並樹つらなりて弥生の花盛りには老若ここに遊覧して瓢を傾け破子を聞き歌読み詩を作り今様をうたひて最にぎわし、殊更此の堤は櫻の宮に対したれば東の岸もらんまんなる花の景色淀川の流れに映じ吉野嵐山も余所ならずおぼゆ⁽²³⁾木村堤 樋の口より南へつゝきたる川岸の堤をいふ。此所も樋の口にひとしく櫻の竝木にて爛漫たる花の白雲淀川の水に映じて眺望言語に絶す⁽²³⁾。

先述したように、木村堤は源八の渡しの上手、その下手が藤堂藩の蔵屋敷、さらに下手が川崎堤で、この先で寝屋川・鯉江川と

合流し、市中に大川として流れこんでいく。つまり、樋の口堤から木村堤、木村堤から川崎、現在の造幣局の南端まで、途切れることのない桜並木であったことがわかる。現在の造幣局の桜が、藤堂藩の桜を移し植えたものであることは既に述べたが、その藤堂藩の桜は、実は対岸の桜に対抗して藤堂藩が植えたものだったといわれている⁽²⁴⁾。大坂に数多くあつた諸藩の蔵屋敷が殆ど商人からの借地であつたの対して、自前の藤堂藩の蔵屋敷は大きく、しかも、『造幣局百年史』などの資料によれば、屋敷詰の「武士達は風流人が多かつたらしく、全国から珍しい里桜を集め屋敷内で育成していた⁽²⁵⁾」とされている。現在、造幣局の構内に咲くのは、関山、普賢象、松月、紅手毬、芝山、黄桜、楊貴妃など120種類、400本といわれ、大半は遅咲きの八重桜であるが、これらはかつての藤堂藩士たちの努力を受け継ぐものだといえる。

このように、天保山の例、桜宮の例から窺えるように、町人たちが自前で桜を植え管理して行楽地としていく、あるいは武士たちが町人に負けじと桜を集めるといった構図がそこにはある。町人の自助努力、与えられたものを享受するだけでなく、自分たちで工面・工夫するという気風の現れを看取することができるのではないだろうか。

II 花見の江戸

それでは江戸の場合はどうか⁽²⁶⁾。江戸の花見の歴史を俯瞰してい

くと、大きく二つの画期があるように思われる。まず最初は、言うまでもなく家康による幕府創設の時期から綱吉の頃である。それは新しい町づくりの中で推し進められた植樹政策に基づくものであった。

慶長八年（一六〇三）、徳川家康による江戸幕府開府以来、江戸城の築城とその城下町の建設が始められる。

この東の覇府は西の都に対して、鎌倉府や室町御所がそうであったように、東都江戸にも大々的な桜の植樹が行なわれた。

元来、この武蔵野台地の海岸段丘には、ヤマザクラやエドヒガンが数多く自生していたのではないだろうか。いまも残る桜田や桜木の町名にその名残を思わせる。

江戸の城下町の建設に当たって、上野から谷中にかけての海岸段丘の自生の桜を保護し、さらに、三河、伊勢から呼び寄せた御用商人たちには郊外の浅草浅茅ヶ原に多数の桜を植えさせ、浅茅ヶ原の千本桜と名付けて春の行楽地とした。

（中略）

三代将軍家光以来、五代綱吉までの江戸の消費経済の発展で、町民たちは、大いに活況を呈する。花見はこの活況の中で、武士も町民も一体となって年中行事化していった。⁽²⁷⁾

その結果、元禄期には既に上野や浅草は代表的な花見の名所となっていた。とりわけ上野はその筆頭であり、「元禄のころの江戸の桜は、谷中感応寺、上野と地続きの法恩寺、浅草観音堂、四

谷自性院、柏木の円性院などが知られていたが、上野ほど人出は多くなかった。上野寛永寺境内は江戸第一の桜の名所で、上野といえは桜、桜といえは上野という言葉が帰ってくるほどであった。⁽²⁸⁾ 例えば、上野と浅草とともに詠み込んだ、芭蕉の「花の雲 鐘は上野か浅草か」の句があるし、また、『芭蕉七部集』の「炭俵」には、次のようにある。

うえのゝの花見にまかり侍りしに、人々幕打さはぎ、ものゝ音、小うたの声さまざまなりにけるかたはらの松かげを頼みて、

四つごきのそろはぬ花見心哉 芭蕉

めづらしや内で花見のはつめじか 杉風

うかうかと来ては花見の留守居哉 丈艸⁽²⁹⁾

あるいは、戸田茂睡の『紫のひともと』（天和三年＝1683）では

東叡山黒門より二王門迄の並木の櫻の下には花見衆なし東照宮の御宮の脇後松山の内清水のうしろ幕はしらかして見る人多し幕の多きときは三百餘ありすくなき時は二百餘あり此外につれたちたる女房の上着の小袖男の羽織を辨當からげたる細引に通して櫻の木に結び付け假の幕にして毛氈、花筵敷て酒呑なり唱物は御法度にてならず小唄淨瑠璃をどり仕舞は咎る事なし本町通町をはじめ有徳成るもさもなきも町方には女房娘正月小袖といふは仕立ず花見小袖とて成程結構に手をこめ伊達なる物數寄に好たるを着て出るなり花より猶見事

なり花の頃は空曇りて大方晝過より雨降る然れとも笠をもさず能小袖をすきとぬらして歸るを遊山にも又手柄にもするなり⁽³⁰⁾

とある。つまり、「町方の女房や娘は正月の小袖はつくらず、花見小袖といつて美しく豪華な小袖をつくった。上野の花見は、当時の下町の女たちが衣裳を競う唯一の場所であつたのである。雨が降つてもわざと傘をささず、小袖の濡れるのも遊山の見栄としたのであつて」、元禄期の江戸の花見の風情および人情をよく伝えている。

しかし何よりも江戸における花見の名所の創出は、八代將軍吉宗の功績によるものが大であつたといえる。その代表的なものとして、桜に限つて言えば次の四つが挙げられる。

a 隅田川堤

墨田川は江戸第一の花の名所にして、此花は、享保の頃、依台命植ゑし處の物にして、今も枝を折ることを禁ずるは、諸人のしる所なり。堤曲行にして木母寺大門へ向ふ所左右より、櫻の枝おひかさなりて、雲のうちに入るかと思ふばかりなり。⁽³¹⁾

墨田川東岸に築かれた堤がいわゆる墨堤であり、永井荷風の『墨東綺譚』で知られるように、この一帯が向島である。対岸である墨田川西岸の浅草に相向う地理的關係から向島という呼称が生まれたようであるが、本来は「江戸の近郊農村としておもに蔬菜類を生産し江戸市中に供給し」「木母寺の辺りに將軍の食用に供す



図4 「江戸名所花暦」

る前菜を生産する御前栽畑が設けられ⁽³³⁾る田園地帯であつたが、「台命」によつて桜並木が形づくられるや一躍行楽の地となつたのである。ここに言う「台命」の主とは、勿論吉宗のことに他ならない。

b 御殿山

慶長元和の間、此地に省耕の御殿ありし故に、御殿山の號あり。土人相傳へて、此地を太田道眞居住の舊趾なりといふ。此所は海に臨める丘山にして、數千歩の芝生たり。殊更寛文の頃、和州吉野山の櫻の苗を植させ給ひ、春時爛漫として尤も莊觀たり。彌生の花盛には、雲とまがひ雪と亂れて、花香は遠く浦風に吹送りにて、磯菜摘む海人の袂を襲ふ。樽の前に酔を進むる春風は枝を鳴さず、鶯のさへずりも、太平を奏するに似たり⁽³⁴⁾。

御殿山は江戸の南の出入口を扼する品川の近郊にあり、「武蔵野台地を構成する淀橋台地のうち、高輪台の先端部にあたる丘陵⁽³⁵⁾」である。「土人相傳へ」る太田道灌旧居説はおそらく俗説で、「江戸時代初期から元禄十五年（一七〇二）にかけて、この地に將軍家の品川御殿が設けられ、鷹狩りの際の休息所として、また幕府の重臣を招いての茶会の場として利用されていた⁽³⁶⁾」ことから生まれた名称らしいが、この海に向かつて開かれた見晴らしのよい勝地に、「寛文の頃、和州吉野山の櫻の苗を植させ」たのも、いうまでもなく吉宗である。

c 飛鳥山

吹上の御庭に櫻。楓の苗多く叢生したるを御覽ありて。小納戸松平専助當恒（後伊賀守）に。よくやしなうべしと命ぜられしにより。別に花欄を設け。懇につちかひ。水そゞぎけるに。いくほどなく其苗五六尺ばかりになりしかば。廣尾。隅田川のほとり。または飛鳥山に植ゑられし。其中にも飛鳥山は享保五年九月より植ゑはじめて。凡櫻二百七十株。楓百本。松百本植られしに。櫻はわきて年を逐て枝葉しげり。花の時は燦爛として美觀をなせり⁽³⁷⁾。

江戸市中の北に位置する飛鳥山はもともと眺望に勝れたところであつた。「飛鳥山の北側は、台地を東西に横断して石神井川（滝野川、あるいは紀伊熊野にちなんで音無川とも呼ばれる）が溪谷をなして流れ、その先、荒川を見おろし、遠く筑波山や日光連山を望む景勝の地であつた⁽³⁸⁾」。そもそもは吉宗がこの飛鳥山の辺りで鷹狩りを催した時、自らの出身地である紀州の熊野権現を祭つたほこらを見つけ、飛鳥山を王子権現の別当であつた金輪寺に寄付したことが始まりとされている。

d 小金井桜

金井橋 多摩川の上水堀兩岸の芝塘にあり。金井村にわたす、ゆゑに名とす。「水源小川村より、新橋の北千川上水の掛口の所まで、凡そ一里あまり、兩岸ごとごとく櫻にして左右の兩岸九村に跨る。また架す所の橋、大小七ヶ所ありて、何れも其地名によりて唱ふ。いはゆる金井橋の類なり。此水

流、西の方羽村より、北にわかれて、江戸に至るまで直流凡そ十里あまり、是を玉川上水と號す。承應の頃、始て此水流を大江戸に引き給ふといへり」此地の櫻花は、享保年間「或云元文二年丁巳」郡代川崎某、台命を奉じ、和州吉野山、および常州櫻川の地より、櫻の苗を植ゑらるゝ所にして、其數凡そ一萬餘株ありしとぞ。^{③④}

ここは前記三ヶ所に比べ江戸市中から最も遠い場所である。したがって、他の名所が日帰りで行楽できる距離にあったのに対して、「江戸からだ」と泊して、国分寺跡や府中をみて帰ってきたという行程であった。市中から西に伸びる武蔵野台地上のこの辺りは地勢上水利に乏しかったが、玉川上水が完成して新田開発が推し進められていった。この玉川上水沿いの「鈴木新田から境新田の境橋まで」「大岡忠相の部下の一人で武蔵野の新田世話役に任命された川崎平右衛門が、元文〜寛保年間（二七三六〜四四）に、小金井橋を中心とする約六キロメートルの長さで山桜を数百本植えたのが」小金井桜の始まりとされる。「郡代川崎某」、すなわち川崎平右衛門が直接指揮を受けたのは直属の上司である大岡だが、もちろんそれは「台命」として吉宗の指示に依るものであることはいうまでもない。

それゆえ「隅田の堤といひ、飛鳥山といひ、小金井といひ、いづれも八代將軍の保護奨励によらぬはなし。幕府中興の英主は又わが櫻の保護者たりしなり。人は武士、武士の統領たる將軍と花の君たる櫻と、げにも奇しき縁なるかな」という賞賛は、吉宗の



図5 「江戸名所図会」

果たした役割の大きさからすれば誇張に過ぎるとはいえない。ではなぜ吉宗は、江戸の各所に桜を植えたのか。山田孝雄氏は旧玉川上水に残る碑文を取り上げて

衆根深く堤の中に入りて長く壞闕の患無からむことを欲したり。且又吾東方の医家一二方函、櫻茹及び花を総べて解毒の劑に用ゐる。則水毒も亦解すべし。⁽⁴⁴⁾

という当時の理解、つまり桜の植樹が堤を強化し、決潰を防止すること、また桜の有する薬効が水質を浄化することができるという当時の考え方を紹介している。それをも含めて種々の理由を想定することができるだろうが、吉宗自身にとつては桜の植樹はどのような意味をもっていたのだろうか。彼が希代の僥倖を経て將軍職に就き、逼迫する幕府財政と硬直した幕府組織を建て直すために行なった諸政策は享保の改革としてよく知られているが、その中の一つに鷹狩りの復興がある。そもそも鷹狩りは幕府創設以来、幕政の一環として制度化されたものであった。

幕府は近世初期に江戸周辺だいたい五里以内の村々を幕府の鷹場に、その外周約五里くらいの範囲を御三家・家門・大藩主などの鷹場に割当てる鷹場の制をとり、鷹匠・鳥見など放鷹に関する職制をととのえ鷹狩を將軍をはじめ大名たちの重要な社交機関としていた。⁽⁴⁵⁾

しかし五代將軍綱吉にいたって生類憐みの令が発せられ、放鷹の制は廃され、鷹は伊豆の新島に放たれ鷹匠たちもその任を解かれた。それを再び復興させたのが吉宗であった。吉宗による鷹狩り

の復活は、一つには彼の気質や嗜好に負うものが大きい。質実、尚武の風は彼の紀州藩主時代以来の施策の根幹にある。もちろんそれだけが鷹狩り復興の理由ではない。たとえば復興にともなつて復活した鳥見職は「目黒掛り・品川掛りというように各筋を分掌分担するとともに、御在宅御鳥見といつて、上目黒村・東大森村・志村・亀有村・東小松村・上中里村・高円寺村の七ヶ所には一名ずつ役宅を構えるものも新設されて、鷹場内にたえず目を光らせ吉宗の鷹狩りにそなえた」が、「この組織は鷹狩りだけのためなく、支配の錯綜した江戸周辺の治安維持を狙つたものである」という、鷹狩りに隠された意図を探る解釈もある。また「これは従来の制度の単なる復活ではなく、その見直しとあらたな組み立てを含むもので、簡素化すべきところと強化すべきところが熟考されたものでした。この鷹狩り体制の再編は、將軍の権威を高めるのに機能したといえるでしょう」という、鷹狩りが生んだ効果を積極的に評価する解釈もあるし、あるいは「心身を鍛え、軍陣の駆け引きの訓練を目的とするとともに、領内を巡視して土地の風俗や民情を知り、また民政の得失を考へるといった政治的配慮」に吉宗の意図を付度する見方もある。⁽⁴⁶⁾

そうした中であつて、白幡洋三郎氏はこの鷹狩りと桜の植樹の関連に注目し、「この鷹狩りの再興と、頻繁な実施、およびその道筋をみると、享保期の桜の植樹による花見名所の出現と鷹狩りが密接にかかわっていることは否定しがたい。すなわち頻繁な鷹狩りルート上に向島、飛鳥山、御殿山の三つがすべて位置して

いるのである」として、その意味するところを次のように説く。

吉宗による桜の植樹と鷹狩りの再興とを考えあわせれば、ひとつには鷹狩り用の資源確保へ向けた野鳥保護のための象徴的な施策が桜の植樹であったとみてよい。またいつぼうでは、江戸周辺の農村における鷹狩りに難儀する農民への慰撫策のひとつとして、都市民を消費者として引き付けるレクリエーション地を形成するための植桜があつたと解釈できる。^⑩

江戸城から北に飛鳥山、隅田川を挟んで東に向島、南に御殿山と、ほぼ等距離に展開する三ヶ所が、桜と鷹で重なるのである。鷹場に指定された村々の「難儀」は、道や橋の普請、鳥類の捕獲や飼育禁止、不審者の詮索、農耕の規制、家屋造作の規制など多岐にわたっていた。^⑪ そうした「難儀」を「慰撫する」意図も充分に働いたのであろうことは推測に難くない。実際、鷹狩りで活躍した武士たちに対する褒賞はもちろん、鷹場の農民たちに吉宗があらわした好意を示すエピソードには事欠かない。

ある時中野のほとりに御放鷹ありしに。田の間こゝかしこに
桃花の咲しを御覧じて。松下伊賀守當任に。このあたりの農民に令して。桃を多くうへしむべし。花おほく咲なば人もあつまり。をのづから土民のたすけともなるべしと命ぜらる。伊賀守うけたまはりて。かたのごとくさせたりしかば。年々に花さきみちて。延享のころにいたりては。春時の美観いふばかりなく。こゝも又遊楽の境となり。日々に往来絡繹たりしかば。衆人花見する時のために。日陰をさくるほどの松を種

べしと令せられて。さて桃を守る農民には。賦税を減ぜられしといへり。^⑫

『徳川実記』などが記す吉宗伝をすべて事実とするわけにはいかないが、彼が武士や農民に質素儉約を求める一方で「春耕秋収のわざをもちかみそなわさむや」という眼を「春耕秋収」の担い手である農民に対して注ぎ続けた將軍であることは間違いない。白幡氏のもう一つの着眼は、飛鳥山などの江戸における地理的位置である。

飛鳥山、向島、御殿山という江戸の花見の三大名所は、都市江戸の中核である御府内と周辺農村の接点にあたり、都市民と農民との接触の場を創りだした。それはあたかも花見が都市で生まれた貴族の宴と農民の宗教行事とを二つの源流としていることの象徴であるかのようだ。^⑬

「御府内と周辺農村の接点」という氏の指摘について、飛鳥山に即していえば、例えば十方庵宗知の『遊歴雜記』（文化十年＝一八二二）に

此地甚醜悪の片鄙にして、近郷に農家少なく、又は邂逅にありといえども、貧村のみにして、かじけたる土地なりしを、当処に数株の花王を植さしめ給ひてより、春秋の間、遠近の瓢客又はもろくの雅人の遊山処となり、花咲そめるあしたより、もみぢうつらふゆうべまで、都鄙の男女爰に集ひ来り宴を催しあそぶ^⑭

とあつて、この地が「片鄙にして」「かじけたる土地」、すなわち

市中の賑わいからは遠く、また稔り豊かな農村からも隔たった中間的な場所であることがわかる。それゆえに「都」からも「鄙」からも男女が集い来る「接点」なのである。ちなみに「かじけたる」とは「痺けたる」(「かしく」から後世「かじく」に転じた語であろうと考えられる)で「しばみおとろえる・やつれ衰える」⁽⁵⁶⁾の意であろう。そのような事情は御殿山にしても隅田川堤にしても同じである。なによりこれらの地が鷹場であることがその証左である。鳥獣が棲息し、市中からほどほどの距離にあつて、狩りが行なえる場、しかも人手を集め、休息の場所も確保できる場として、「御府内と周辺農村の接点」は最も適当な場所であつたといえるだろう。その「接点」とは、場所としての接点であるとともに、同時に交流の接点でもある。

そして江戸の花見は、もういつぼうで、農民の民俗のなかにみられた飲食をとまなう「春山行き」「春山入り」ともつながっている。それはいうならば、農民の行事が都市に入り込んできたものでもあつた。貴族的なものや農民的なものとの融合でもある花見は、それゆえ江戸周辺部に、すなわち都市江戸と農村の接点で花開いたのである。⁽⁵⁶⁾

花見が民俗的には「春山入り」と呼称される農耕の予祝儀礼であつたことは最初に触れた。そして中期には百万に膨れ上がる江戸の人口は、武士や上方から移入した商人を除けば、その過半は江戸周辺、つまり北関東・南関東から流入した、江戸落語「長屋の花見」に登場するような庶民層であり、その出自は大半が農民

層であつただろう。都市民となつた彼らの中には、農事的な時間感覚・季節感覚が強く残留していたにちがいない。そうした感覚や意識を吉宗は巧みに掬い上げていったのではないだろうか。江戸城で生まれ、過剰な庇護の下で成長した他の將軍とは異なる経歴の中で、將軍職を吉宗が継いだことはよく知られている。吉宗でなくては執る能わざる政策であつたといふべきであろう。いずれにせよここで注目したいのは、こうした花見の名所が「お上」から、將軍から与えられたもの、下賜されたものである点にある。

その意味において、大石学氏が、

このように吉宗は、首都圏の東西南北の地に行楽地を用意したのである。しかし、これらの行楽地の多くが、いずれも將軍の鷹狩と深く関わる場所であつたことは注意すべきである。庶民の行楽は、將軍の御場、御場所のうちで、あくまでも幕府・將軍から賜わるという形式をとつたのである。享保の改革の行楽地の整備もまた、武家抱屋敷の規制と同じく、江戸周辺地域の再編成の一貫としての意義を持つものであつた。⁽⁵⁷⁾

と指摘するのは重要な事柄であるだろう。「幕府・將軍から賜わるといふ形式をとつた」のが江戸の花見なのである。そのことは吉宗によって創りだされた花見の名所だけにとどまるものではない。吉宗に先行する、つまり墨田堤や飛鳥山、御殿山、そして小金井に先行する花見の名所、たとえば上野においても事情は同じ

である。「江戸の桜の名所としては早くから上野の山が名高かった。寛永元（一六二四）年起工の寛永寺に將軍家光が吉野の桜を移し植えて以来、上野は毎年花見の客でにぎわった」⁽⁵⁾のであり、吉宗ほど大規模ではないにしろ、ここでも主役は將軍であり、下賜された花見の名所であることには変わりはないのである。

このように見えてくると、江戸と大坂における花見の名所の成立が、各々の人文的風土、すなわち、それぞれの都市の地勢、そこで行なわれる町造りの特性、それらの中で培われる精神的土壌と深く関わっていることが見て取れるのではないだろうか。江戸時代のみならず近代においても、さらには現代においても官の江戸、民の大坂という対比はしばしば行なわれるが、花見においてもそれは当てはまるように思われる。武蔵野という豊かな植生に恵まれ起伏に富んだ地形を有する江戸と、淀川河口に人工的に発展した平坦な地形の大坂という地理的条件の相違のみならず、そこに暮らす人々の町造りへの参加の意識、官民の関わり方の違いも大きく反映しているのではないかと考えられる。

注

(凡例) 本稿における引用は、引用文献の表記に従う。

- (1) 桜井徳太郎編『日本民俗学講座 信仰伝承』朝倉書店、一九七六年、八八ページ。
- (2) 佐佐木綱・卷上安爾・竹林征三・廣川勝美・神尾登喜子『景観十年 風景百年 風土千年』蒼洋社、一九九七年、四五ページ。
- (3) 以下の天保山の築造や川浚えについての論述は、前稿「天保山―都市

景観と花見」『阪南論集 人文・自然科学編』第36巻4号と内容や引用資料に重複するところがある。併せて参照いただきたい。

- (4) 森修編『日本名所風俗図会 10 大阪の巻』角川書店、一九八〇年、四一七ページ。
- (5) 「浪華の賑ひ 合冊」中外書房、安政二年刊・昭和五十二年復刊、三一ページ。
- (6) 「懐中難波雀」『大阪市史史料第五十三輯』大阪市史編纂所、二〇〇〇年、二九ページ。
- (7) 『大阪古地図集成』大阪都市協会、一九八〇年。以下に取り上げる絵図、図面類はすべてこれに依る。
- (8) 柳原康夫『淀川兩岸一覽 宇治川兩岸一覽』同朋舎、一九七八年、四八三ページ。
- (9) 『摂津名所図会大成 其二』柳原書店、一九七六年、三七七ページ。
- (10) 財団法人大阪都市協会編『都島区史』都島区制五十周年記念事業実行委員会、一九九三年、四六五ページ。
- (11) 笑福亭松鶴『上方落語』講談社、一九九一年、「桜の宮」一四六一―一五一、「百年目」三七七―三八五ページ。
- (12) 以下「」で示す箇所は、割り注か二行分ち書きである。
- (13) (8) に同じ、三八七―八八ページ。
- (14) 「御触及口達」『大阪市史 第四上』大阪市役所、一九七九年復刻版、九四三ページ。
- (15) (14) に同じ、九五九ページ。
- (16) 「手鑑拾遺物」『大阪編年史 第十七巻』大阪市立中央図書館市史編纂室、一九七四年、五四ページ。
- (17) 「大渡冥加金銀高寫」(16) に同じ、五五―五七ページ。
- (18) 砂持ちの行事については、大阪市史編纂室の渡邊忠司氏が書かれた『大坂町人物語 商都の風俗と歴史』(中央公論社、一九九三年)に詳しい。
- (19) 渡邊忠司『大阪十二月物語―近世の大阪風物詩』リサイクル文化社大阪編集室、二〇〇一年。

- (20) (4) に同じ、四二八ページ。
- (21) 「諸事控(上) 浜親仁海部屋喜兵衛覚書」〔大阪府史史料第五十四輯〕大阪府史編纂所、二〇〇〇年、五八八ページ。
- (22) (5) に同じ。
- (23) (8) に同じ。四二七ページ。
- (24) 東秀三「淀川」編集工房ノア、一九九三年。
- (25) 『造幣局百年史』大蔵省造幣局、一九七六年、一一一ページ。
- (26) 以下の江戸の花見についての論述は、前稿「天保山—都市景観と花見」『阪南論集 人文・自然科学編』第36巻4号と内容や引用資料に重複するところがある。併せて参照いただきたい。
- (27) 小川和佑「日本の桜、歴史の桜」日本放送出版協会、二〇〇〇年、一九—二〇ページ。
- (28) 南和男「都市の世相」宮田登編『日本民俗文化大系11 都市と田舎 マチの生活文化』小学館、一九八五年、四九九ページ。
- (29) 白石悌三・上野洋三校注『新日本古典文学大系70 芭蕉七部集』岩波書店、一九九〇年、三九五—三九六ページ。
- (30) 楠瀬恂編輯『隨筆文学選集 第十』書齋社、一九二七年、一〇二—三ページ。
- (31) (28) に同じ。四九九—五〇〇ページ。
- (32) 塚本哲三編輯「江戸名所花暦」『江戸名所圖會四 有朋堂文庫』、一九二七年、四〇六ページ。
- (33) 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第十三巻 東京都の地名』平凡社、二〇〇二年、六七七ページ。
- (34) 塚本哲三編輯『江戸名所圖會一 有朋堂文庫』、一九二七年、三三二—六ページ。
- (35) (33) に同じ。七五五ページ。
- (36) (35) に同じ。
- (37) 黒板勝美編輯『新訂増補國史大系第四六巻 徳川実記第九篇』國史大系刊行會、一九三〇年、三〇二—三〇三ページ。
- (38) 大石学「地名で読む江戸の町」P H P 研究所、二〇〇二年、一九九ページ。
- (39) 塚本哲三編輯『江戸名所圖會一 有朋堂文庫』、一九二七年、五一—七ページ。
- (40) 小木新造他編『江戸東京学事典』三省堂、一九八七年、七五八ページ。
- (41) (33) に同じ。一〇六六ページ。
- (42) (38) に同じ。二一九ページ。
- (43) 山田孝雄「櫻史」講談社、一九九〇年、三〇九ページ。
- (44) (43) に同じ。三〇八ページ。
- (45) 大石慎三郎「第八代徳川吉宗」北島正元編『徳川将軍列伝』秋田書店、一九七四年、二四〇ページ。
- (46) (45) に同じ。二四一ページ。
- (47) 根崎光男「将軍の鷹狩と江戸周辺農村」加藤貴編『大江戸歴史の風景』山川出版社、一九九九年、八九ページ。
- (48) 秋葉一男「吉宗の時代と埼玉」さきたま出版会、一九九五年、二九ページ。
- (49) 白幡洋三郎「花見と桜へ日本的なるもの」再考』P H P 研究所、二〇〇〇年、一五三ページ。
- (50) (47) に同じ。九五—九八ページ。
- (51) (37) に同じ。三〇三ページ。
- (52) (37) に同じ。二六九ページ。
- (53) (47) に同じ。一四八ページ。
- (54) 朝倉治彦編訂『東洋文庫499 遊歴雜記初編1』平凡社、一九八九年、一〇五ページ。
- (55) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典 第一巻』一九八二年、七五〇ページ。
- (56) (47) に同じ。一五四ページ。
- (57) 大石学「吉宗と享保の改革」東京堂出版、二〇〇一年、一二九ページ。
- (58) 原田伴彦・芳賀登・森谷尅久・熊倉功夫編『図録・都市生活事典』柏書房、一九九一年、二〇九ページ。

図1 「天保山名所図会」

森修編 『日本名所風俗図会 10 大阪の巻』

角川書店、一九八〇年、四一七ページ。

図2 「淀川兩岸一覽」

永野仁編 『日本名所風俗図会 11 近畿の巻』

角川書店、一九八一年、一九三ページ。

図3 「天保山名所図会」

図(1)に同じ。四二八ページ。

図4 「江戸名所花暦」

朝倉治彦編 『日本名所風俗図会 3 江戸の巻Ⅰ』

角川書店、一九七九年、七九ページ。

図5 「江戸名所図会」

朝倉治彦編 『日本名所風俗図会 4 江戸の巻Ⅱ』

角川書店、一九八〇年、三一九ページ。

(二〇〇二年六月二六日受付)

(二〇〇二年十月四日掲載決定)